

2011. 2. 10

最終講義

「20世紀から21世紀へ～放送は何を伝えてきたか～」

名古屋大学メディアプロフェッショナルコース客員教授

長縄 年延

2011年2月10日（木）15:00～17:00

名古屋大学文系総合館7階カンファランスホール

<メディアプロフェッショナルコースについて>

名古屋大学にメディアプロフェッショナルコースができて8年間。田島先生と当初の準備段階からかかわらせていただいた。私の大学生活4年間の倍、教養部は滝子だったので、2年間の4倍もここに通うことになるとは想像もできなかった。

平井研究科長と法学部先輩の宇佐美さんから「大学院にジャーナリストを育てるメディアスクールができないか。協力してほしい」との要請。当時のNHK名古屋放送局長川上淳氏、そしてNHK本部とも相談し、現役・OBふくめてNHKとして協力させていただくことになった。私はそのコーディネーター役が主たる役割。私自身、関連会社含め46年NHKにお世話になったので、その体験と人のつながりでお役にたてればと考えた。

*メディアプロフェッショナルコースの特徴

- (1) メディア関連の企業の協力、社会連携講座であること。中日新聞、NHK、電通、東海テレビから客員教授、現役の講師を招いて講義が行われている。JR東海、中部電力、ブラザー工業、ミツカンなど東海地方の主要企業広報関係者の協力で企業広報論も開講されている。
- (2) 卓越した見識と先見性をもった人材・メディアプロフェッショナルの育成。今まで6回卒業生を社会に送り出し、今年は7回生を送り出すことになる。修了生の進路は、中日新聞、日経新聞、毎日新聞、NHK、NHKプラネット、電通、読売広告社、ぴあ、楽天、任天堂等メディア関係の企業に就職。また東芝、富士通、NTT西日本、日本IBM、アサヒビール、ブラザー工業、アイシン精機等にも。メディアスクールの役割を果たしつつある。卒業生が信頼され、このメディアプロフェッショナルコースからさらに多くの人材が育って社会に貢献してほしい。
- (3) アジア、日本特に東海地方のメディアの教育、研究の拠点としての役割。専任教員、博士後期課程も充実、優れたメディア研究者も育っており、国境を越えて、メディアの教育・研究拠点として社会、歴史に貢献すること。メディアプロフェッショナルコースに学ぶ留学生も多い。

アジアの将来に貢献できる教育・研究拠点になりたい。

- (4) メディアプロフェッショナルコースの講義が、他の大学院研究科、学部、他大学、社会人等に広く公開されている。来年度は、社会連携講座は学部生の単位にもなる。公開シンポジウム、スタジオチャンネルなどメディアに関する情報を広く外部に発信することも重要だ。

<放送メディア史論について>

私の講義は「放送メディア史論」と現場のプロデューサーの協力を得て「放送番組制作論」、またドキュメンタリーなどコンテンツ制作でも皆さんと付き合うことができた。年末年始を返上してつきあったことも・・・。

「放送メディア史論」は、私がNHK放送文化研究所にいたころ「20世紀放送史」の編纂に3年間携わった経験もあり担当。厚くて重い「20世紀放送史」をテキスト・材料にして皆さんと一緒に、20世紀の歴史と放送を中心としたメディアの歴史について学ぶことができた。私自身のNHK時代を振り返り、放送メディアの果たしてきた役割を検証することができた。

20世紀から21世紀へ。メディアは大きく変貌している。どういう方向に変わろうとしているか。

メディア史の研究では、あるメディアの全盛時代にはその実態はなかなかつかみにくい。次世代のメディアの出現によって、初めて本当の姿が見えてくるといわれる。そのメディアがどんなメディアであったか、どんな役割をもち、どんなメッセージを伝え、どのように人々に受け入れられていったか、次のメディアの出現によって見えてくる。

20世紀は、マスメディアが大きく発達した時代。マスメディアの世紀といってもいい。新聞、雑誌等活字メディアは、交通・通信手段の発達もあり、何十万部、何百万部の大量出版が可能となった。電報・電話、無線通信からラジオ放送へ、そしてテレビ放送へ。電子メディアの発達は、放送メディアの発達とともに地球を一つに結び付けた。

そして20世紀末から21世紀へインターネットの急速な発達は、マスメディアという巨大装置をもった業界関係者だけでなく、一人ひとりの個人が世界に向かって発信することを可能にした。いま地球は、海底ケーブルや衛星回線でぐるぐるとクモの巣のように張り巡らされ、世界中の情報がメディアによってつながっている。政治、経済、社会、私たちの一人ひとりの生活もメディアを抜きには語れない時代に生きている。21世紀は、どうなるのか？メディアの歴史をふりかえりつつ、近未来3年先。5年先を予測したい。

メディアを勉強したり研究したりするのに、歴史の中でメディアをとらえることは重要。ラジオメディアについて見てみたい。

＜ラジオ放送の歴史＞

・ラジオの誕生 活字文化である新聞雑誌が大量出版、頒布が可能になった時代に登場。通信からラジオ放送へ。第1次世界大戦で軍事上、無線通信が使われた。大戦が終わり、この技術がラジオ放送の誕生につながった。アメリカ、ヨーロッパでラジオ放送の開始。1920年アメリカKDKA, 1922年イギリス放送会社(BBCの前身)放送開始。ラジオ熱。ニュース速報に有力なメディアであり新聞社が熱心だった。国か民間かどちらが担うのか？

1925年日本のラジオ放送の開始。1923年関東大震災。デマがとびかい正確な情報が伝わらなかった。「情報が命を救う」ラジオの重要性の見直し。しかしラジオは不幸な時代に誕生した。ラジオの第1次黄金時代は1930年代「ファシズムの時代」「総力戦の時代」とすっぽり重なる。国民国家形成のプロパガンダメディアとしてラジオは位置付けられた。

1939年9月1日 ドイツ軍のポーランド侵攻 第2次世界大戦はヒットラーのラジオ放送の演説で始まった。これに対抗して、9月4日、イギリス国王ジョージ6世の対ドイツ宣戦布告のラジオ放送。

1941年12月8日午前7時の臨時ニュースが告げる大本営発表。太平洋戦争は、ラジオ放送で始まった。

「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部午前6時発表。帝国陸海軍は、本8日未明、西太平洋において、アメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり。今朝陸海軍部からこのように発表されました。」

天気予報中止、語学講座中止、原則全国放送は東京発、毎正時のニュース、「国民の誓い」「国民に告ぐ」「週間戦局」「勝利の記録」「前線へ送る夕べ」「前線銃後を結ぶ」等の番組。総力戦を進めるための最も重要なメディアとしてラジオ放送は位置付けられた。国民の戦争意欲を掻き立て参加させるメディアとして。総力戦のプロパガンダの役割を担わせられた。海外放送の役割は「強力な思想戦の先兵であり、姿なき爆弾である」と位置づけられ、対敵の謀略放送にも使われた。

ETV 特集「戦争とラジオ」(2009.8.放送) ラジオを通じていかに国民を総力戦に進んで参加させるか、放送局員が知恵をしぼっていたか、再現座談会。

ミッドウエー海戦、カダルカナル島、アッツ島、サイパン島の玉砕、大本営発表は真実を伝えず

1945年8月15日 昭和天皇による「玉音放送」。

「朕深く世界の大大勢と帝国の現状とに鑑み非常の措置を持って時局を收拾せむと欲し茲に忠良なる爾臣民に告ぐ。朕は帝国政府をして米英支蘇4国に対しその共同宣言を受諾する旨通告せしめたり。……」 「朕は時運

の赴くところ耐え難きを耐え忍びがたきを忍び以て万世の為に太平を開かんと欲す」

太平洋戦争は終わった。

玉音放送は、終戦のメディアイベントであった。

「太平洋戦争はラジオ放送で始まり、ラジオ放送で終わった」

戦後ラジオ放送は、解放されたが。連合軍にとっては「民主化」「非軍事化」を徹底する最も重要なメディアであった。GHQによる検閲。1950年朝鮮戦争の直後には、メディアのレッドパージが行われた。しかし新憲法で言論表現の自由がうたわれ、1951年（昭和26年）民間放送が始まり、1952年日本の独立。1953年 テレビ放送が始まる。1955年ソニーの基礎をきづいたトランジスターラジオの発売開始。1950年ごろから1960年までは、ラジオの黄金時代であった。豊かなラジオ文化も育った。われわれの小学校時代はこのラジオの黄金時代、われわれはラジオと共に育った。

1958年11月 ラジオ受信契約1481万、放送開始以来の最高。

ラジオはテレビのマスメディアの王座を譲り、サブカルチャーとなり、その特性を発揮。個人への呼びかけ、お便りの紹介。個人個人と親密なインタラクティブなメディアとなった。いまは、ラジオとインターネットは親密な関係でファンをつかんでいる。

<テレビ放送の歴史>

「遠くのものを見る」tele-vision は人類昔からの夢。ラジオと同じ時期から開発が始まっていた。1910年代各国でテレビ開発急速に進む。日本では1926年高柳健次郎のイの字から始まる。

定期的なテレビ放送は、1935年第3帝国のベルリンで開始され、1936年のベルリンオリンピックの中継放送によって注目された。日本でも1940年の東京オリンピックで計画されたが、戦争で中止、幻となった。アメリカ、イギリスでも開始されたが、第2次世界大戦によって中断、テレビ放送が本格的に始まったのは、第2次世界大戦後であった。

日本では1951年正力テレビ構想が読売新聞紙上で発表される。A級戦犯の容疑をかけられていた正力松太郎が、アメリカの技術を導入。「共産主義の脅威に対抗するには、テレビは最大の武器である」(カール・ムント上院議員演説) 1952年日本テレビに予備免許。電波監理委員会の最後の仕事。

1953年(昭和28年)、NHKが2月1日と日本テレビが8月28日、テレビ放送を開始。高価なテレビはなかなか普及せず、初めは街頭テレビの時代。力道山等の活躍するプロレスや大相撲中継で黒山の人だかり。

テレビ普及の引き金になったのは1959年（昭和34年）のご成婚式中継。1953年イギリスのエリザベス女王の戴冠式を做って演出したといわれる。パレードの一般家庭の平均視聴時間は10時間35分。戦後憲法第1条の象徴天皇制を実体化したといわれる。

1964年の東京オリンピックでテレビ普及は90%に到達。テレビの普及は、マスメディア全体に大きな影響を与える。ラジオの受信者数、映画の入場者は以降急速に減少する。

テレビは日本の高度成長と重なり成長発展した。「三種の神器」（洗濯機、冷蔵庫、テレビ）として家庭に普及。日本は、1969年イギリス西ドイツを抜いてGNP世界第2位となる。その後「新三種の神器」と呼ばれた3C（カー、クーラー、カラーテレビ）の普及。テレビドラマ、テレビコマーシャルによって「神器」が普及するけん引役ともなった。テレビは日本の高度成長とともに、マスメディアの王様となった。ビデオテープレコーダーの普及も忘れることはできない。

テレビメディアをマスメディアとして拡大させたのは、衛星中継の技術である。1963年・昭和38年11月、東京オリンピックの為のアメリカから日本への衛星中継の実験で、ケネディ大統領の暗殺が伝えられた。1964年10月東京オリンピックの開会式が初めて衛星中継によって、アメリカに伝えられた。衛星中継は、国境の壁をこえて地球を一つにつないだ。マクルーハンの「地球村」の実現。オリンピックやワールドカップサッカー中継は、世界をひとつの劇場に変えてしまう力をもっている。

報道においても、テレビはベトナム戦争の終結に大きな影響を与えた。また1989年のベルリンの壁崩壊、東西ドイツの統一、東ヨーロッパの相次ぐ社会主義独裁国家の終結、ソビエト連邦の崩壊、そして冷戦の終結。テレビは世界の歴史の転換にも衛星放送が大きな影響を与えた。

衛星中継の技術と小型カメラ撮影・収録技術が結び付き、ENG(Electronic News Gathering) SNG(Satellite News Gathering) 世界中から現場中継や素材伝送が可能になった。テレビ報道の時代が出現した。

テレビの持つ報道、教育、娯楽、広告機能において、テレビは20世紀のマスメディアの頂点に立った。

私自身はテレビの成長期、発展期、成熟期にテレビの主として報道番組の制作にあたってきた。20代の静岡時代は、朝のローカル番組は、40%の視聴率。交通事故、公害、町内会、PTA、地方自治などローカルキャンペーン番組は、恐ろしいほどの手ごたえがあった。「ここを何とか」という番組があったが、当初にもとづいて解決策を探る番組だが、取り上げれば必ず前進解決。市長会の反対にあってやめざるをえなかった。

< 20世紀から21世紀へ 放送メディアはどうか >

20世紀末から21世紀へインターネットの急速な発達、マスメディアという巨大装置をもった企業だけでなく、一人ひとりの個人が世界に向かって発信することを可能にした。いま地球は、海底ケーブルや衛星回線でぐるぐるとクモの巣のように張り巡らされ、世界中の情報がメディアによってつながっている。世界中の情報がWWWによってつながり、検索によってあらゆる情報が手に入る時代になった。政治、経済、社会、私たちの一人ひとりの生活もメディアを抜きには語れない時代に生きている。

「スマートフォン」「アイパッド」の普及、テレビも「ネットテレビ」「スマートテレビ」の時代に急速になっていくだろう。「いつでも、どこでも」の時代に。「時空を超えて」メディアに接触できる時代になっていく。

20世紀を支配してきたマスメディア、雑誌・新聞、映画、ラジオ・テレビは、インターネットの出現によって最盛期を過ぎ変容を迫られている。テレビは報道、娯楽、教育、広告機能において優位を誇ってきたが、陰りが見られ最盛期は過ぎつつある。インターネット、ツイッター等が影響を与えたといわれるチュニジア、エジプト等の政変もメディア史から見ると注目すべき事件だ。

テレビメディアは、報道、教育、娯楽、広告機能でわれわれに大きな影響を与えてきたが、いまマスメディアとしての最盛期が過ぎつつあるとき、その評価、分析、研究がこれから求められている。

テレビは政治を身近にしたが、ポピュリズム・大衆迎合主義が蔓延。健全な民主主義の発達にとって果たしてどうなのか。

20世紀は、映画、テレビの登場で初めて映像によって歴史が記録された。歴史は今まで活字によって書かれ編纂されてきたが、蓄積された膨大な映像ライブラリーの分析、再現により新たな歴史がかたられていく。歴史ドキュメンタリーの可能性は大きいと思う。

さて放送メディアがこれからどうなるか。テレビはどうか。

個人的なメディア体験から予感。予感といってもいいかもしれない。ラジオと映画で育ったわれわれ。テレビ初期街頭テレビの時代も経験。テレビは我々の生活に食い込み、朝7時、12時、19時テレビニュースを見る。朝ドラ、大河など生活の一部。テレビCMを見て衝動買いも・・・。

今も、私自身テレビは大好きでよく見る。ニュース、ドキュメンタリー、スポーツ、ドラマなど。50インチのデジタルハイビジョンテレビで。

7月地上波アナログ放送廃止で、今デジタルテレビがよく売れている。ヤマ

ダ電気で何が一番売れているか聞いたら、アクオスのハードディスク内蔵型。横から DVD を差し込めば簡単に録画が可能。私も、ハードディスクに録画し選択して自由な時間に見るようになった。時間に縛られないで見ることができる。しかし、スポーツ中継は生。ビデオリサーチの視聴率ランキングも、アジアカップなどスポーツ中継が上位を占めている。

録画を忘れたらNHKオンディマンドで、2週間は見逃しパック（945円）で見られる。ニュースは生で見ていたが、NODで見るが多くなった。時間に縛られない。ニュースの項目全体を見てみたい項目の選択も可能。ラジオの「リトルチャロ」「実践ビジネス英語」録音していたが、ネットで聴くようになった。個人的にテレビとインターネットが融合しつつある。

2011年7月、地上波、衛星波全面デジタル化。アナログ放送廃止。放送通信融合の時代を本格的に迎える。

アメリカでは、1996年電気通信法が改正され、規制緩和と業界再編成が進んだ。日本は？新聞と民放は密接な関係にあったが、これからは通信業界、商社、メーカー含めて再編成の時代に。

公共放送NHKは？新NHK松本会長の課題は、ネット時代の公共放送のビジョンをどう描くか、ネット時代の受信料制度をどうするか。

放送と通信の融合の時代、インターネットの時代、ここ数年の近未来のビジョンが求められている。

メディア激変の現代にあって、メディアの教育・研究拠点として、メディアプロフェッショナルコースの果たす役割はおおきい。

期待しています。頑張ってください。

(終り)